

年別に見た犬と猫の主要感染性因子の流行状況

Prevalence of major canine and feline infectious agents by year

相馬武久

Takehisa SOMA

マルピー・ライフテック株式会社臨床検査部

Veterinary Diagnostic Laboratory, Marupi Liftech, Co., Ltd.

演者が現在所属しているラボでは 1993 年の設立以来、昨年までに最長で 24 年間の犬と猫の感染症検査のデータが蓄積されている。そこで今回、犬と猫の主要感染性因子の流行状況の変動を知るために、当ラボで蓄積されている犬ジステンパーウイルス (CDV)、犬伝染性肝炎 (犬アデノウイルス 1 型; CAV-1) (以上犬)、猫免疫不全ウイルス (FIV)、猫白血病ウイルス (FeLV)、猫コロナウイルス (FCoV) (以上猫) 及びトキソプラズマ (Tg) (犬及び猫) の検査結果を解析し、陽性率の年次変動を検討した。

CDV は ELISA による IgM 抗体検査、CAV-1 は CAV-1 と犬アデノウイルス 2 型 (CAV-2) の同時中和抗体検査、FIV は免疫酵素細胞的検査、FeLV は p27 モノクローナル抗体を用いた ELISA、FCoV は ELISA、Tg はラテックス凝集反応により検査した。なお、CDV IgM はワクチンの影響がない抗体価 1:400 以上、CAV-1 は血清学的な部分交差性を利用して CAV-1 抗体価 > CAV-2 抗体価の場合に陽性と判定した。

解析した検査結果の実施期間と検査数は CDV、CAV-1、FIV、FeLV、FCoV、犬 Tg 及び猫 Tg、それぞれ 1999 ~ 2016、1995 ~ 2016、2001 ~ 2016、2001 ~ 2016、2001 ~ 2016、1993 ~ 2016 及び 1993 ~ 2016 年、14,654、1,424、23,842、23,842、23,842、2,198 及び 8,844 データであった。なお、重複例、1 病院で多数依頼された例、実験動物及び犬猫以外の動物は除外した。

犬における CDV と CAV-1 の陽性率はそれぞれ 2005 年頃、2000 年頃までは比較的高率に陽性例が

検出されたが、両者とも近年陽性率が著しく減少していた。なお、犬 Tg では陽性率の有意な減少は見られていない。一方、猫の FIV、FeLV 及び Tg では大きな陽性率の変動は見られなかったが、品種別に見たところ、各年とも雑種が純血種よりも高い陽性率であった。そして、純血種の陽性率は年々減少しているのに対して、雑種では 3 因子ともに減少はなく、むしろ上昇する傾向が見られた。これに対して FCoV の陽性率は純血種が雑種に比べ高値を示し、調査期間に両種ともに大きな変動は見られなかった。

今回、犬と猫の感染性因子の年次変動に違いが見られた。犬で CDV と CAV-1 の陽性率が近年低値を示しているのに対して、猫の FIV、FeLV 及び Tg では減少する傾向はなく、雑種に限るとむしろ上昇傾向が見られた。近年、室内飼育される猫が増加しており、その割合は純血種の方が高いと推測される。このことが純血種での陽性率の減少に関係しているのであろう。これに対して、屋外飼育や外出の機会が多い雑種での上昇傾向は野外での流行状況の悪化を示している。一方、FCoV は多頭飼育環境 (キャットリー) で流行する傾向があるため、ブリーディングコロニーやペットショップを経ている可能性の高い純血種で陽性率が高くなる。そして、その陽性率は両種ともに大きな変動が見られなかったことは野外、キャットリーともに依然流行していることを示すものである。なお、犬の Tg の陽性率の減少が見られなかった要因として、猫での Tg の流行の継続が関係していると考えられる。

野外で猫の感染性因子が依然流行している要因と

して野良猫や地域猫の存在が挙げられる。一方、犬の主要感染症は小康状態にあり、その要因として猫に比べると野良が少ないことと、猫と同様に室内飼育される犬の割合が増加していることに起因すると推測される。しかし、犬以外の動物、特に野生動物

ではCDVやCAV-1、さらにその他の犬ウイルスの感染例が確認されており、犬への感染源となる可能性も否定できない。このため、犬猫だけでなく野生動物についても感染性因子の継続的な調査、解析が必要と思われる。